

国保直診が守るべき理念と、 新しい時代に求められる変化

11月18日(日)、OKBふれあい会館において開催しました。今学会は、地域医療及び地域包括ケアの実践の方途を探究するとともに、関係者の相互理解と研鑽を図るために、「国保直診が守るべき理念と、新しい時代に求められる変化」をテーマとして、研究発表、特別講演、シンポジウムを展開し、国保診療施設職員及び関係者等、245人の出席がありました。

開会式では、北川浩司学会長(東白川村国保診療所長)より開会あいさつ、岐阜県国保診療施設協議会の黒木嘉人会長(国保飛騨市民病院長)が主催者あいさつを述べられました。

続いて、来賓を代表して岐阜県健康福祉部の森岡久尚部長よりあいさつがあり、ご臨席いただいた岐阜県市町村保健活動推進協議会保健師部会の高木千春部会長(海津市)の紹介がありました。

研究発表は、3会場に分かれて国保診療施設の医師、看護師、市町村保健師等から日頃の研究や活動結果などに関する57演題の発表が行われ、各会場では聴講者から活発な質疑が出るなど熱気に包まれていました。

午後の特別講演は、県北西部地域医療センター国保和良歯科診療所の南温氏より、「国保直診が守るべき理念と、新しい時代に求められる変化」2035年40年問題を見据えて」と題し、講演が行われました。

その中で、和良村の歴史や国保直診としての理念を述べられ、また、地域包括医療・ケアとは、地域住民一人一人の24時間、365日、80年の医療ではなく、生活をサポートすることである。地域が目指すべき方向性は、出来るだけ、地域住民を「医者要らず、病院要らず」の健康状態に保つことが重要であり、歯科分野からみた咀嚼機能と健康余命についても述べられました。また、各地域

の特性に応じた「地域包括システム」を構築すれば良いが、「2035年40年以降問題」に対応出来る地域システムを今すぐに考えない限り、そ

の地域や地域住民の明日は無い！そして、地域住民の「当たり前」、地域の「文化」になるには、最低でも「15年」「20年」かかる！今年から始



学会長 北川浩司



副学会長 改田哲



岐阜県健康福祉部
部長 森岡久尚



岐阜県国保診療施設協議会
会長 黒木嘉人



次期学会長
川尻宏昭

めても2033年、2038年になると述べられました。

次に、「わたしたちのこれまでの取り組みとこれから」をテーマにシンポジウムが行われ、市町村長、診療施設代表者、特別養護老人ホーム代表者、市町村保健師のそれぞれの立場から地域医療の取り組みの状況や地域包括医療・ケアについての発表があり、最後に助言者として岐阜県国民健康保険診療施設協議会の高山哲夫相談役より助言をいただきました。助言の中で、地域包括ケアを推進していくためには、市町村長と診療に携わっている担当者が車の動輪のように回らないといけない。地域づくりのためには、医療は欠かせないものである。そして、それぞれの地域に何が大切なのか、地域住民の方々が何を求めているか、そこにこれからの私達の活路が見いだせるのではないかと思うと述べられました。

続いて、午前の部の研究発表の中から4人の優秀研究発表者が選ばれ、学会長から表彰状が授与されました。その後の閉会式では、次年度の第24回岐阜県国保地域医療学会長の川尻宏昭高山市国保高根診療所長から開催に向けたあいさつが行われ、最後に改田哲副学会長（恵那市国保山岡診療所長）の閉会あいさつで全日程を終了しました。

<特別講演>

演題 「国保直診が守るべき理念と、新しい時代に求められる変化」
～2035年40年問題を見据えて～

講師 県北西部地域医療センター国保和良歯科診療所長 南 温

司会者 第23回岐阜県国保地域医療学会長 北川 浩司



南先生

<シンポジウム>

テーマ 「わたしたちのこれまでの取り組みとこれから」

司会者 岐阜県国保診療施設協議会会長 黒木 嘉人
第23回岐阜県国保地域医療学会副学会長 改田 哲

発言者 東白川村長 今井 俊郎
国保関ヶ原診療所長 島崎 信
瀬音さくら山荘施設長（庄長） 竹中 健
下呂市健康医療課 課長補佐 保健師 森本 千恵

助言者 岐阜県国保診療施設協議会相談役 高山 哲夫



発言者



司会者

助言者

<優秀研究発表者>

最優秀

「当院におけるがんリハビリテーションの現状」

下呂市立金山病院 理学療法士 吉田 千鶴子 氏

優 秀

「完全側臥位法による肺炎死亡率減少への挑戦」

国保飛騨市民病院 管理栄養士 久保 一輝 氏

「外来における高齢糖尿病患者の
インスリン自己注射の確認～特に手技について～」

東白川村国保診療所 看護師 樋口 亜生 氏

「輝ける里山ナースに焦がれて」

国保飛騨市民病院 看護師 岩崎 美幸 氏

